

我が一冊の本

教授 門脇 健
(宗教哲学 宗教学)

浄土真宗では「本願」はもちろん「信心をもって本とせられ候う」などと「本」という漢字が重要な位置にあるように思う。このような「本」と、図書、書物、書籍を「本(ホン)」と呼ぶことに何らかの関係があるのだろうか。一度きちんと調べてみたいと思いつつ定年退職を迎えることになった。死ぬまでには調べたいと思うが、やはり「一度きちんと調べたいと思いつつ死ぬことになる」かもしれぬ。

しかし、定年退職に当たって我が研究生生活を振り返るとき、一冊の書物が、まさにその研究生生活の「本」となったと思う。G. W. F. HEGELの *PHÄNOMENOLOGIE DES GEISTES* (『精神現象学』) という「本」である。もちろん1807年の初版本ではない。DER PHILOSOPHISCHEN BIBLIOTHEK (哲学文庫) 略して PhB (ペーパーバック) に第114巻として収められた、J. HOFFMEISTERの校訂による1952年の第6版。その何刷目かは不明だが、緑色の布表紙、天は金ではなく赤茶色の本である。まだ PhB にはペーパーバックなんてものはなかった時代。この本を買ったのは1975年ごろだと思う。「研究生生活の本」と言うわりには、いい加減な記憶だが、この本を購入したときはまさかこの本とこんなに長く付き合うとは思っていなかったのだから仕方がない。

しかし、購入した場所はよく覚えている。大谷大学正門の南隣の至誠堂書店。鴨川を越えて自転車をとばし、はるばるこの学術洋



書専門店にやって来て、この本を購入した。4,050円也。そのころ下宿していた松ヶ崎の4畳半が一ヶ月8,000円という時代の4,050円だから相当の値段である。何を思ってそんな高い本を買ったのか。大学の演習のテキストとして買ったのか、それともそれ以前に参加していた自主ゼミのテキストとして購入したのか、これもよく覚えていない。しかし、欧文の文系学術書が所狭しと並び積み上げられていた至誠堂でこの本を買ったときの胸の高鳴りは、今思い出しても息苦しいくらいである。

その至誠堂がこの夏ついに閉店となってしまった。いろんな事情があったのだろう。何よりもネット販売の威力。私なども、安さと速さにつられてついついネットを通じてドイツに直接注文して購入することが多くなり、至誠堂閉店の片棒を担いでしまった。そしてコピーの発達。600頁ちかくあるドイツ語の本を大学の一年間の講読演習で読めるわけがない。それで、教員として授業をする際、ついついコピーで済ましてしまう・・・という

ようなことで学生が直接洋書店に赴くことが少なくなりました。あれだけ世話になっておきながら至誠堂には不義理をはたらいてしまった。

私が学生のころ、自主ゼミや講読の授業の時、その年度に読む範囲のコピーを渡されていたらどうなっていたであろう。授業やゼミで読む範囲を調べて授業で確認してそれで終わってしまったように思う。しかし、幸か不幸か、当時は今のようなコピーはなかった。大学院の頃、ゼミで発表するときのレジュメは「青焼き」と呼ばれた湿式のコピー。大量に印刷される学生運動のビラは謄写版。「青焼き」とか「謄写版」などというシロモノは、今の若い人には何のことか分からないということは十分承知であるが、それを説明しだすと大変なことになるので、とにかくコピーが40年ほど前は大変面倒なことであったとご承知願いたい。

ともかく、下宿代の半分もした本である。買ったからには元を取らねばならぬというさもない根性も手伝って、それほどドイツ語も読めないのに辞書を片手に図書館でこの本を読んだのであった。しかし、スラスラ読めるわけがない。内容も抽象的でさっぱり分からない。となると当然のごとく眠くなる。眠くなるとその本の上でうつぶして、よだれや汗を垂らしながら寝る。そのころの図書館はそれほど涼しくなかったのだろうか。そのうち、本自体が汗臭くなってくる。今だったら、消臭剤を噴霧するところだが、当時はそんなものはなかったから、そのころはやっていたオーデコロンを買ってきてジャバジャバ振りかけた。すると事態は一層悪くなり、なんとも言えない奇妙な臭いを発する本になってしまった。慌てて陰干しをして事なきを得たが、本には気の毒なことをしてしまった。また、あちらこちらに赤や紺色の色鉛筆で線をひっ

ぱったり書き込みをしたりして何が何だか分からなくなってくる。

しかし、そのようにして一冊の本と付き合い合っていると、愛情のようなものが芽生えてくる。つまり、研究発表のために本を利用するというのではなく、なにかに促されるままにあちらを読んだりこちらを眺めたりして、この本の声を聞くという感じで読むのである。本と読者の相互的な愛情と言いたいところだが、まだ本の方から愛のささやきが聞こえてくるというような境地には至っていない。しかし、そのような関係が育ってきた本を持ちえたことは、我が拙い研究者生活のいちばんの幸福であったと思う。そして、それは何かに惹かれて文字通り身銭を切って購入したことに始まったように思う。いったい何に惹かれて、自転車をこいで鴨川を渡り大谷大学横の至誠堂まで、学生だった私はやってきたのだろう。そのことを確かめるのが、これからの楽しみである。これだけはなんとか死ぬまでに確かめたいと思う。